

# 詩誌『詩学』の世界（2）

## 戦後10年からの展開

宮崎 真素美

本稿は先年、「詩学」創刊から昭和二〇年代（昭22・8～昭29・12）に至る「はじまりの10年」を考察した「詩誌『詩学』の世界―はじまりの10年」（『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』七号 令3・3）に続く期間と内容を対象とする。前稿では、「1 近代詩史との接続 2 マチネ・ポエティク 3 同時代詩人評 4 詩学研究会 5 谷川俊太郎という存在 6 鮎川信夫の先見性」として、近代詩史との接続、戦時下との接続、同時代との接続、後進との接続の意識を指摘した。

今回の対象時期は、それを継ぐ昭和三〇年代前半の五年間（昭30・1～昭34・12）であり、戦後一〇年の節目とともに日本の戦後詩における重要トピックが、開花する詩人たちの存在感とともに次々にあらわれてくる展開期と見て取れる。考察には、愛知県立大学所蔵の『詩学』を用いた。

### 1 昭和三〇年の入り口

まず、昭和三〇年の皮切りとなる同年一月号（10巻1号）を見てみたい。特集「現代日本詩集」には、各年代の詩人たち四三名の作品が並ぶ。そして、「詩壇の動き」では、安藤一郎がベルギーで開かれた「国際詩学会議」に出席した様子が報告されている。西欧の小国が力を入れていて、イギリスは代表不在、アメリカも主要詩人は来ず、主要言語はフランス語といったなかで、安藤は短歌俳句でない日本の現代詩の発展状況を、「詩人三千、詩誌一千」と語り存在感を示したとされている。国際会議という名の「詩人の祭典」に出席し、その後イギリスに赴きスペンダーらと面会、「育つか、枯れるかわからない」、「困難で徒勞に終わるかもしれない種まきをし

て来た」安藤に対し、「心からの拍手を送ろうではないか」と結ぶ様子からは、国際交流におけるはじめの一步の感覚が伝わってくる。

そして、本号で目を引くのは、金子光晴、壺井繁治、村野四郎、北園克衛による「五十代の発言―座談会―」である。これは、ちょうど一年前の昭和二十九年一月号（9巻1号）で、これまで批評の対象とされてきた谷川俊太郎ら二十代の詩人たちによっておこなわれた座談会「二十代の発言―座談会―」（飯島耕一・高橋宗近・谷川俊太郎・大岡信・中村稔・川崎洋・山本太郎・嵯峨信之・木原孝一）と対をなす格好となっている。前稿でもふれたとおり、「二十代の発言」では、谷川が「宇宙」と「モラル」を接続させたり、戦争経験に対する観念性を述べたのに対し、同じ二十代であっても少し年長の詩人たちは、戦争経験を肉体的に捉える先行世代と近しい感覚を持っているといった差異が明かされ、興味深いものだった。「五十代の発言」では、谷川への応答さながら金子が次のように述べる。

たとえば谷川俊太郎の詩を読むでしょう。宇宙に対する考え方とか、地球に対する考え方とかそういうものは（笑声）われわれもピンと来ないくらい観念的なものだがね。

（ここで注目されるのは、先の「二十代の発言」にも出席していた

谷川、大岡、川崎、山本といった詩人たちに先行世代から継承するものがなく、断絶の不満が生じていると指摘された、その「断絶」の捉え方にある。金子らは谷川の詩を「古めかしい」と述べ、北園は「第一次大戦後に現われて来た新しい芸術というものと関係がない」とする。村野は自身において問われると、民衆派に対しての断絶感があったが象徴派に対しては踏み台にしようとは思ったが断絶はない、北園はそれを受けて断絶する必要がなかったと断言する。北園らが新しさにおいて第一義におくモダンイズム詩と象徴詩との親和性が、谷川ら二十代の詩人たちの作風を批評することで明確に言表されている。

一方、話題の谷川が特集「現代日本詩集」に寄せた「舌切雀」は、言葉と愛の本質とをシニカルな散文詩で象っている。（もう何も云えなくなつた もうおじいさんと呼べない もうおばあさんの悪口も言えない）とリズムカルにはじめられる詩篇の世界は、「おばあさん」によって舌を切られた雀（ほく）に、「おじいさん」の呪縛的な（愛）や（言葉）からの解放の物語を語らせる。（熱くて重い言葉 どんな意味も負わずただ僕の意味だけにみちあふれた言葉）、（それが今ほくの歌だ）、（おばあさん あなたは正しい おじいさんの愛からあなたはほくを解き放つてくれた おじいさんの言葉からほくの歌をよみがえらせた ほくを一羽の雀にもどしてくれ

た あなたの憎しみの力で、（おじいさん あなたはぼくを愛したけれど）もぼくは人間にはなれなかつた 決してあなたたちの言葉は解らなかつた、（言葉はいらない ぼくらには歌だけがある）と、（ぼく）は勢いづくが、最後には、（家へ帰るのがいや）な（じいさん）が舌切雀を探し続ける（哀れな声）を背景に、（くちばしには赤い汚れを残したまま 歌はもう息んでしまった）、（今は舌の痛みだけが彼をいら立たせる）、（疲れたように舌切雀はつづらの蓋でくちばしを二三度こすつてみたりする……）と、語り手による傷んだ倦怠感で幕を閉じられる。

誰もが知る昔話を独特な愛の物語として変奏したこの詩篇は、同年出版の谷川の詩集『愛について』（昭30・10 東京創元社）に収録される。舌を切られたにもかかわらず、リズムカルでポジティブな（ぼく）の独白による前半と、そうした（ぼく）を寂しい倦怠感で相対化する語り手による後半といった劇仕立ての構成の中で、（言葉はいらない ぼくらには歌だけがある）と舌切雀に語らせるところに、谷川は、後述するような詩劇に対する音韻の意識を響かせているのかも知れない。

「詩壇時評1954」（署名X）では、「一九五四年は詩集の刊行が戦後最も多量であったのではないかと、十二月号の編集後記で城氏が書いている」、「良い詩を生むということはこれとは全く別の事

柄」とあり、詩の活況と質の問題が問われはじめている。このように総括された前年を受けて、昭和三〇年の扉は開かれていった。

## 2 詩劇の流行

この時期の特徴的なことごとがらとして、「詩劇」創作の流行があげられる。その理由を、「詩壇時評1956」（無署名）（11巻9号 昭31・8）は、エリオット以下西欧詩人の影響もさることながら、新しい表現形式を以て表現しなければならないものが彼等を突き動かしたと分析、自らも詩劇を創作する木原孝一は、「言葉を本当に生かす意味では、詩人と劇作家の協力によつてしか、この達成は考えられない」とし、「日本語」とその「リズム」の問題であり、「大きく言う」と日本文化の問題」であると位置付ける。時評子の言う「エリオット以下西欧詩人」に即せば、中桐雅夫がすでに、「W・H・オウデン&C・イシャウッド 犬になつた男―詩劇論の一部―」（7巻4号 昭27・4）、「W・H・オウデン&C・イシャウッド 国境にて―詩劇論の一部―」（7巻6号 昭27・6）、「W・H・オウデン&C・イシャウッド 国境にて―詩劇論最終篇―」（7巻7号 昭27・7）を連載、また、「七〇歳をむかえたT・S・エリオット」（13巻13号 昭33・11）として、同年発表の新作詩劇

「老いたる政治家」にリアルタイムで言及があるなど、関心の高さがうかがえる。

そうした影響を受けながら、意識化され追究されてゆくのが、日本語における「音韻」の問題である。押韻定型詩の創作発表を、昭和一七年に朗読会の形式ではじめた「マチネ・ポエティク」の作品を創刊号から掲載した『詩学』は、そのひとり中村真一郎が自身の試みに対する内省的かつ他罰的な吐露（「マチネ・ポエチックその後」5巻3号 昭25・4）に至るまでの三年間を共にし、その結着を見届けたのだった。<sup>注2</sup>中村はそこで、「現代日本語の貧しさと荒さとは、具体的には、第一に概念の混乱、第二に音感の不快さ、である」と述べたのだったが、先にあげたように、木原が詩劇創作を「日本語」とその「リズム」の問題であり、「大きく言うとならば文化の問題」としたことは、マチネ・ポエティクの試みとその終焉との二重映しを、読む者に引き起こしただろう。

鮎川信夫、茨木のり子、川崎洋、北園克衛ら十二名が登場する「コレスボンダンス／現在の私の仕事」（10巻2号 昭30・2）において、茨木のり子は、「いま、詩劇「埴輪」を權に書いています。詩劇と銘打てるものかどうかわかりませんが、私の詩劇に対する考えを、ひとつの作品としてまとめることができました……と思つています。」と詩劇創作に意欲を見せ、その一方で北園克衛は、「昨年<sup>注3</sup>

はじめから「稀薄なるポエジーの展開」をテーマとして継続しているという意味深長な報告をしている。翌月の安西冬衛、上田敏雄、谷川俊太郎、中桐雅夫ら十二名による「コレスボンダンス／私の詩的実験」（10巻3号 昭30・3）では、谷川俊太郎が、「1、日本語の音韻をもう一度丹念に試み、その方向から、詩劇の可能性を探究すること。2、詩以外の方法を実験すること。」と明瞭に述べ、（私は倦いた／私は倦いた 我が肉に／私は倦いた 茶碗に旗に歩道に鳩に）と、全行頭で（私は倦いた）をリフレインする「無題」（10巻7号 昭30・6）を直近で発表、翌年には（＊カンタータ台本＊）と副題し、各連を、〈prelude〉〈ballads〉〈blues〉〈waltz〉〈serenade〉〈air〉〈march〉として書き分けた「幽霊の歌」（11巻1号 昭31・1）、その翌々月には「唄二つ」（11巻4号 昭31・3）と題し、次のような「口上」付きで二篇（ただこれだけの唄「七つの四月」）を掲載した。

日本の新しいうたを目指して、友人の若い作曲家、俳優たちと、グループをつくりました。まだ大変未熟なものが、近作を二つお目にかけます。詞だけでは勿論不完全なものが、前者はギターの弾き語りによるスロウバラード、後者はにぎやかなサンバです。いずれお耳に入る機会の参りますまで、音楽の方はよろしく御想像いただければ幸甚です。

先の「コレスボンダンス／私の詩的実験」で述べていることがらの実践であり、谷川のジャンル横断的な活動の端緒が、この時期の「詩劇」をきっかけとした新しい表現形式の追求によって開かれていったことが知られる。

谷川らが「詩の実験」について述べた「コレスボンダンス」と同号（10巻3号 昭30・3）の「詩壇時評1955」では、詩劇のあり方について実例をあげながら具体的な言及がなされており、当時の様態がよくわかる。上演に際しては、劇団員による「誇張朗読」について、「詩の美しさ」や「詩のモラル」は「抑制」にあるとし、「エリオットの言う「第三の声」（論者注「詩人自身から完全に独立した人物を通じて語られる声」）を持つて欲しい」と戒め、創作については、「ある一つの観念を執拗に造形し追求するという生き方が主要」であり、「抽象精神」や「批評的」であることの重要性を指摘している。翌月の「コレスボンダンス／詩劇・抱負と実験」（10巻4号 昭30・4）では、木原孝一が詩劇実作において「自己の声」しか出せず、「言葉と詩人の声」を「立体的にドラマとしての対立を詩に於ける必然として発見することが先決問題」とし、ここにおいてすでに、「詩人と劇作家の完全な協力」が「研究と実験のための意見の交換」から必要であると述べている。木原においては、「詩劇」が問題になつてから、そろそろ五年」という認

識である。

このあと、本節冒頭でふれた「詩劇」流行の理由を分析した「詩壇時評1956」（無署名）（11巻9号 昭31・8）をほさみ、「詩壇時評1957」（12巻8号 昭32・7）では、「今年」に入つてから「考える詩から歌う詩へ」というスローガンが多く言われるようになったとある。言うまでもなく「荒地」の詩人たちが標榜した「歌う詩から考える詩へ」の裏返しであり、「荒地」に対する批判がここ数年持続的（「評論」唐川富夫「詩学年鑑1958年版」13巻2号 昭33・2）といったなげれとも一致する。「外部的にはシャンソンの試作」、「内部的には日本の風土的な抒情派の抬頭」がそのあらわれとされ、理由については、イマジズムの行き詰まり、「考える詩」の全盛による反動、民衆にアピールするための「歌う詩」があげられている。しかし、「考える詩」は必要であり二者択一ではないこと、「歌う詩」が喧伝されはじめたのが原因でもあるまいが、「今年になつて見るべき詩論が殆どない」、「詩人と社会の底の浅さを痛感する」と指摘は続く。ここで興味深いのは、「詩劇」への言及がないことである。そして、それによつて気づかされることがある。「詩劇」は見てきたように、「音韻」や「リズム」といった音楽的要素を通じて、谷川の実践のように「うた」へ連繫されながらも、一方で、「観念」、「抽象」、「批判」（「詩壇時評1955」と

いった思考的要素も求められてきた。つまり、「歌う詩」と「考える詩」という観点からすれば、この両要素を併せ持つ高度で困難なジャンルとして措定されたのが「詩劇」だったのでないか、木原の詩劇創作への執心もそうしたところに起因しているのではないか。これら二項対立があらためて取り上げられたこと、そして、その対立のなかに「詩劇」が取り込まれていないことよって、「詩劇」に求められていた「新しい表現形式」の内実が照らされているようにも思われる。

詩劇創作に取り組んでいた茨木のり子は、「詩と演劇のあいだ」（12巻11号 昭32・9）で次のような心持ちを明かしている。「敗戦という激動期」がなかったら、自分は絶対に物書きにはならなかった、「劇」を書きたかったけれど台詞に引っかかってうまくゆかなかった、そうして、人々への呼びかけであり、訴えであり、なぐさめであり、憤激である「詩」を書いてみると、「口の悪い仲間」から、「そんな詩を書く、ぐらいなら、女の代議士になればよかつたんだ」と言われたりして、「なれるものならなつてみたい気がする」。しかし、そうなったときの失望も想像できる、と言う。茨木にとつて「劇」は抑制的なものであったと知られる。そして、ここで述べられている「女の代議士」をめぐることから、詩篇「大学を出た奥さん」（『現代詩』昭33・6、「見えない配達夫」昭33・11 飯塚

書店 収録）の最終連、〈大学を出たかかさま／麦畑のなかを自転車で行く／だいぶ貫禄ついたのう／村会議員にどうだろうか 悪くないぞ／ビイビイ〉を形成した気配をふくんでいるのも、おもしろい。

### 3 『死の灰詩集』論争

昭和二九年三月一日、静岡県焼津市のマゲロ漁船第五福竜丸が、ビキニ沖でおこなわれたアメリカの水爆実験による「死の灰」を浴びた事件によって、原水爆禁止を求める市民運動をはじめ、さまざまな動きの起こるなか、同年一〇月に「現代詩人会」によって、アンソロジー『死の灰詩集』（宝文館）が編まれ、『詩字』に登場する詩人らも多くふくまれました。同年七月の九巻七号（昭29・7）でも、この事件に関する言及が随所に見られるが、翌三〇年の一〇巻四号（昭30・4）には、前年一二月、S・スペンダーが *Britain To-Day* に発表した、「WAR, PEACE AND POETRY」が「戦争・平和・詩」として堀越秀夫訳で掲載された。スペンダーはここで、「一人の人間の平和の宣伝は他の人間の戦争の宣伝である」とし、『死の灰詩集』に感銘を受けたとしながらも、「私たちの側の作家」が「確信をもつまでは発言を抑制しているように見受けられるのを嬉

しく思っている」と述べる。

これを受けて、黒田三郎は翌号の「詩論批評」（10巻5号 昭30・5）で、「自分にとつてそれが最も重大なことだからといって、そのすべてを詩にあらわすことができるとは限らないのである」と同意する。そしてさらに翌号、鮎川信夫が「戦後詩人論」（臨時増刊『現代詩戦後十年』10巻6号 昭30・6）で、スペンダーの述べる「確信」と響かせるように内部と外部との関係を、「確実な内部を持たないかぎり、確実な外部というものはありえない」、「確実な」とは自分自身の価値体系を持つこと、「内部と外部は相関関係」、「内部とはさまざまな外部が意識化したものであり、外部とはさまざまな内部が物質化したものに他ならない」、「対立関係にあるものではない」、「個人の「意味」を育てること」、「人の内部の創造的、発展的な力が、たえまなく保持されてゆくことが問題」であると説く。

同月の「詩壇の動き」／「死の灰詩集」論争（10巻7号 昭30・6）では、スペンダーの意見に向かう「詩人の態度」の相違をまとめている。伊藤信吉、北川冬彦、深尾須磨子らは、それぞれスペンダーの態度を傍観的だとして批判、対して鮎川が「常識的で穏健」と評価し、『死の灰詩集』作品の多くが、水爆を招来した文明の背景を捉え得ずに浅薄な抗議や叫喚の声をあげていると批評した

ことを紹介している。そして翌号の「詩壇時評1955」（10巻8号 昭30・7）は、スペンダーの言う「確信をもつまでは発言を抑制」することについての賛意を示している。さらに、同号の黒田三郎「詩論批評」（10巻8号 昭30・7）は、鮎川の「死の灰詩集」の本質（『東京新聞』昭30・5）と、前々号の「戦後詩人論」とを取り上げて高く評価する。黒田は「原水爆の問題が持つている意味」と「死の灰詩集」自体との間にあるズレを指摘、「問題自身（A）」、「それぞれの詩人がそれについて「書かねばならぬ」としてゐるもの（B）」、「実際に書かれたもの（C）」、この三者間の食い違いが論争の重要な原因と捉え、「詩人の態度」は「書かれたもの」が一切であるとする。そして、鮎川の「『死の灰詩集』の本質」で展開されている論理が、黒田の示す（C）（B）（A）の順でおこなわれ、作品から問題自身の持つ認識を問うている点に共感を示している。つまり、「詩人がすぐれた詩を書くこととする前に、集団的な示威運動に走ること」は「詩人の社会的責任」に値しない、とするのである。それは、戦時中に「戦争賛美の詩」を書き、戦後に「水爆反対の詩」を書く「詩人の社会的責任」を明らかにすべきとする鮎川の「戦後詩人論」への強い支持の表明である<sup>註</sup>。

翌号の嵯峨信之による「編集後記」（10巻9号 昭30・8）が、スペンダーの考えにふれて、「詩の社会性、政治性」は観念的な問

題としてでなく、具体的な「日常感覚」として「解決の見透しすら情緒化され、一つの詩的美に高められているような詩こそ今日の詩ではないかと思われた」こと、「詩の政治性、社会性」という文学は、西欧では二十年前に終つてしまつた文学だろう」と認識されたと述べていることが印象的である。そして、鮎川は「死の灰」詩集論争の背景―その成立・過程・終結（10巻11号 昭30・10）で総括をおこなう。

こうした「死の灰詩集」をめぐるさまざまは、関わつた多くの「詩人の態度」をそれぞれに際立たせる役割を果たした。なかでも、鮎川の集団と個に対するぶれない論調は獨創性を發揮したと言えるだろう。しばらくののち、鮎川らよりひと世代若い中村稔も、「現代詩のエッセイスト―鮎川信夫、関根弘、大岡信、安東次男―」（12巻13号 昭32・11）において、鮎川のエッセイは多くの場合相対的であり、否定的発言（『死の灰詩集』など）において最も説得力を持っていると評価する。ちなみに、他の論客たちに対しては、関根弘は敵を定めてものを言うが本人が思っているほど相手は傷つかず、そのエッセイのつまらなさもその辺りに由来している、大岡信は良い意味での啓蒙家であり、自身の体験に根ざしてきわめて整理された形で提示をする、安東次男は啓蒙的でなくわかりにくい文章である、とそれぞれに媚びない体で評している。

『死の灰詩集』論争は、遡つては戦時下の『辻詩集』、下つては湾岸戦争詩論争との連なりにおいて重要であり、スペンターの俯瞰的見解とともに、社会的な出来事に対する際の「如何に」は、何時においても参照されるべき褪せない問題である。こうしたことから関する向き合い方や提供の仕方は、「詩壇の公器」としての自負を持って出発した『詩学』のあり方を参照することにもなつただろう。

#### 4 戦後一〇年と「詩壇の公器」

編集人のひとり城左門は、『詩学』創刊号（昭22・8）の「編輯後記」において、「詩学」の目的を「詩壇の公器的存在たらしめようとする」、「広く文学的総合誌たらんとする野心抱負」、「詩精神を以て貫かれた総合誌」、「他面の導入に依つて詩それ自体を培はうとする」と述べた。昭和三〇年代に入り、『詩学』は「戦後十年」（臨時増刊『現代詩戦後十年』昭30・6）と、その翌年に創刊「一〇〇号」（11巻4号 昭31・3）を眼差す機会を設けた。ここでは特に、自誌に対する相対化を試みた後者における座談会「100号記念座談会 詩学の功罪」（村野四郎／北川冬彦／壺井繁治／草野心平「出席者」城左門／嵯峨信之／木原孝一「編集部」）を取り上げた

い。七名は愉快な批評性を以て忌憚なく『詩学』を照らしている。

まず、「公器性」に関わるところとして、一時「荒地」の書店みたいだった（北川）、流行っている人に書いてもらう（嵯峨）といった内側の事情はさらに、五十代の詩人たちが『詩学』に書かなくなった原因が原稿料の問題にあったこと、それがために若い詩人たちに集中したのは結果的に良かったが物足らないところもあり、公器としての面目はなくなった（北川）という分析にも及んでいる。同じく懷事情に言及される「海外詩の紹介」については、一番努力して資金を投入したのが海外英米詩選だった（嵯峨）ことが明らかされている。そして、資料が全部は揃わず、仏独は全然入っていない（木原）、エリオット以降に限定した（木原）が、『詩学』が先んじておこなったのは功だった（草野）という評価に繋がっている。

そして何より自他共に認められるのが「新人」育成だろう。いい若い新人を出したのは『詩学』の功績だ（村野）、『詩学』で一番感ずるのはそれで、今でも一番面白いのは研究会の作品欄だ（草野）、いいと思ったところから頼んでいっしょにやってもらいたいという気持ちが出る。みんな『詩学』がなくても出てきた詩人たちだろうとは思いますが、チャンスを与え、足場を持てたのは良かった（草野）と、草野は「新人欄」を絶賛している。木原や嵯峨は戦前との

異なりや彼ら自身の経験から、「戦前に書いていた詩人との間にエポケットができると思つた。僕らが少年の頃には若草とか、割合ブルがあつたんですよ。けれど詩学以外のそういうブルを作るという場所がなかつたもんですから、若草だったら推薦という形で堀口先生みたいな形でやるのを、あれをやるのは嫌だという一応の目安をつけようというわけではじめた」（木原）、「投稿という匂いをどうして消すかということを考えた。それで研究会として毎月継続的にやつて行くということで匂いを消そうとした」（嵯峨）と、その新しい戦略性を語つた。

さらに、その上の世代が引き受けた新人作品の選評について、村野は五年くらいやつてくれた（城）、村野はとても一生懸命にやっていて感心した、自分は頼まれたがとてまかなわなれと思つて受けなかつた（草野）と述べ、当の村野は、とても楽しみだった（村野）と言ひ、そのあと金子が一生懸命やつた（草野）、実直だね（壺井）と選評者の大変さと真摯に向き合つたことを讃え、その後の複数選評者による合評形式への移行についても、みんなでもやる方法になつたのはなかなかいい（草野）、読者の方から合評にしてほしいという希望が非常にあつた（嵯峨）、『詩学』が和歌や俳句の宗匠になりたくない（城）、公平でなくなれば雑誌が売れなくなる（嵯峨）と、肯定的にふり返る。

その一方で、北川や壺井からは、公器という点で若い詩人にとつては役割が果たせているが、年配の自分たちは原稿料など関係なく書こうと思うと、匿名で自分の悪口などが書いてあつて書く気ななくすといった生身の述懐もあり、それに対して村野は、「古い詩人と新しい詩人が合流する場所だから悪口も出るだろう」と冷静である。また、『文学界』などがやっている匿名批評をやつてみたかつた（嵯峨）となると、「あれは、わざわざ……僕なんかつまりああいう詩学みたいな雑誌の性格としてはそうしたわざわざみたいなのがチャゴチャしたのはいいような気がするけれども」（草野）、「わざわざならいいが、そんなピリツとした気の利いたものじゃない」（北川）と混ぜ返されてもいる。

「詩人賞」に関わつて草野から出た発言には、『詩学』は公器という看板を下ろした方が良く、新しい詩のジャーナリズムを作るといい、もっと楽にやればいい、「荒地」の連中がウンと書いているということも問題になつたが、それも一つのジャーナリズムでいいと思う（草野）と、骨太な見解が見える。また、戦後詩人たちにおいて重要な「翻訳」については、戦後は研究者と詩人の見方が近づいてきて、質の悪い翻訳で良しとはならなくなつてきた（木原）、源氏のような散文はともかく、芭蕉英訳など滑稽で見えられない（草野）、それで英米詩選が売れなかつたのだ（村野）といった現実

的な見方が共通している。

こうした多角的なやりとりを経た今後のあり方としては、鳥瞰図的な仕事は辞める（草野）、オーソドックスが大事（村野）、勝手にジャーナリズムを作つてほしい（草野）、『日本詩人』にはなりたくない（木原）と言ひ、硬直化しない動態的な方向が求められており、あわせて、NHKの放送詩集の聴取者が八万人（村野）で、『詩学』は七千人、一万人になれば、いろいろ編集部のプランどおり原稿料も払えるから良いと思うが、そうならない原因を考えている（木原）と、印象のみに陥らない具体的な数字をあげての今後も示されている。三年後には『現代詩手帖』が創刊（昭34）され、伊達得夫の急逝による『ユリイカ』廃刊（昭36）、その三年後には『現代詩』の休刊（昭39）といった変化のなかで、『詩学』もますますそのあり方を模索する時期を迎えることになる。

## 5 吉本隆明と大岡信

『詩学』における吉本隆明の登場は、詩篇「異数の世界へおどりゆく」（10巻7号 昭30・6）であり、翌月の「作品月評」（10巻8号 昭30・7）で、鮎川信夫がさっそく取り上げている。鮎川は、「思想的にも肉体的にも、現実の経験によつてずいぶんいためつけ

られた人間の詩である」とし、すでに発表されている「固有時との対話」や「転位のための十篇」との異なりを、「思想的なためらい」に見ている。「今まで全面に押し立てていた思想的なもの、倫理的なものをいくぶん後退させ、人間を確実にデッサンすることに立ちもどつている」とし、「強い論理的性格と執拗な追求の精神が充分にうかがわれる」と評価している。そして吉本は論客としての才も発揮し始める。壺井繁治、岡本潤の愛国詩と戦後詩にふれた「前世代の詩人たち―壺井・岡本の評価について―」（10巻13号 昭30・11）は、黒田三郎が翌号の「詩論批評」（10巻14号 昭30・12）において、「単に時代とともにながれてゆく一個の庶民の姿勢があるだけだ、と言いつつ切つている。擬ファシズム的煽動の詩から、擬民主主義情緒の詩へ、である」とまとめたごとくであり、さらに、論じ手である吉本と岡本とが列島出版記念会で顔を合わせた折の模様を、その翌月の「詩壇の動き／動静」（11巻1号 昭31・1）が次のように伝え、吉本の論評をめぐるドラマが誌上で形成されている趣がある。

列島出版記念会席上で岡本潤、吉本隆明の二人が顔を合せた。いろいろ前世代詩人として攻撃されている岡本氏、指名されるや立ち上つて吉本氏の「前世代詩人論」の妥当であること  
を率直に認めこれは個人の問題としてではなく、もつと早く起

るべき批判であつたとして、みずからもアポロジイではなくひとつの批判として書きたいと述べて多大の感銘を与えた。

そして翌月、岡本潤「詩人の対立」（11巻3号 昭31・2）が掲載される。岡本はここで、「プロクルーステースのベッド」(Procrustean Bed)／無理矢理、基準に一致させる)を多用しながら、「政策的に「海ゆかば」をうたわせる支配階級と、実感をもつてうたう被支配階級との隔絶を見ることのできない、あるいは見ようとしぬい」「インテリゲンチヤ」として吉本や鮎川を位置付け、「明確なリアリズムの立場によつて頹廢の根源を追及することを、ほくの課題にしたい」、明確なリアリズムを「まだ、それを体系的に明示できるまではないたつていない」としている。

対する吉本は、「プロフィール／吉本隆明」（11巻8号 昭31・7）において、戦争責任論は戦後責任であり、「戦争中の生き方で現在を批判しているのでもなく、ただ「表現の責任」として書かれたものだけを論じているのである」と述べ、同号掲載の「戦後詩人論」では、「荒地」「列島」「第三期の詩人」を取り上げ、「荒地」グループによる内面性の拡大にふれている。こうした吉本の取り上げられ方は、まさに「登場」である。

同じく詩論家としての大岡信も「登場」してくる。「現代詩試論」（8巻8号 昭28・8）、「戦後詩人論―鮎川信夫ノート―」（9

巻5号 昭29・5)、「詩人の死—エリユアールの追憶のために—」(9巻7号 昭29・7)、「詩の条件」(9巻12号 昭29・12)など、続々詩論が掲載され、鮎川信夫にも挑みかかる。黒田三郎「詩論批評」(10巻3号 昭30・3)はそうした大岡と鮎川の相似性を、「感動」をめぐる両者の姿勢(「感動」というものが、計算して読者に与えられるものではない)(大岡)、「感動に原理はない」(鮎川)の「照応」や「ダイアレクテイクに似たものがある」と指摘しており、この点については論者も、大岡の論理に鮎川の影が色濃く映し出されているようであることを別稿で指摘した。<sup>注6)</sup>

先に吉本が論評で取り上げた壺井繁治は、「Corner / 若い二人のエッセイスト」(10巻4号 昭30・4)において、鮎川ら並み居る「詩人や詩論家よりもあとから登場してきた詩人で、エッセイストとしても日本文壇の知名な評論家にくらべて決してひけをとらぬばかりか、群を抜いている詩人が二人思ひだされる」として、清岡卓行とともに大岡の名をあげ、彼らによる日本のシュルレアリスム批評を絶賛に近く高く評価している。そして、いよいよ大岡の「戦後詩論の焦点」(臨時増刊「現代詩戦後十年」10巻6号 昭30・6)が、鮎川の「戦後詩人論」と並んで掲載され、翌年からは新人作品の登竜門である「研究作品合評」(11巻3号 昭31・2)の評者に谷川俊太郎とともに加わって一年担当、そのあとは「詩論批評」

(12巻4号 昭32・3)を担当し、精緻な論評を重ねてゆく。さらに、鮎川が委員長を務め、関根弘が編集長を務める「現代詩の会」の編集委員として、吉本や谷川とともに役員に名を連ねるようになる。その後も長く論客として活躍する吉本隆明と大岡信は、こうして昭和三〇年代初頭に勢いよく登場してきたのだった。

## 6 「權」の解散

吉本と大岡の活躍同様、谷川俊太郎、大岡らと「權」で活動する茨木のり子への注目も衰えることがない。長江道太郎「戦後詩人研究 6 茨木のり子論」(10巻11号 昭30・10)は、頭のいい話し方が女のひとには珍しく、適当に賢く適当にウイットがあり、その精神の成長が「權」の中では一番にまた大人でもあるようだとし、茨木が金子光晴論を書いていることに対しては、「外から型で締めあげて作品を結晶さす」方法を探る三好達治や草野心平とは異なり、「内からのほとばしり流れる向きに流れせしめる内が外を支える金子光晴的な形式」が茨木にふさわしいと、人生への実感の強さとともにその必然性を指摘している。また、女性らしからぬ風情のエロティシズムをあつげられんと表出する詩篇があることや、女性科学者に通ずるようなものが見えるとの印象を語り出している。総じ

て、女性らしからぬ女性詩人とする内実が確と捉えられているとは言いがたい論ではあるが、特異な存在であることが印象づけられた筆致である。

また、「詩壇時評1956」（無署名）（11巻7号 昭31・6）では、茨木の詩篇「行動について」に「決意の美しさ」を見、詩集『対話』の詩篇について、「こんなに単純素朴な形で詩をかくためには、なみなみならぬ勇氣と、知的でリアルな精神がいる」、「こういう詩こそ本当に知的なのだということを、改めて言っておきたい」と、詩篇を支える知性の強調がなされ、同年の「プロフィール」（11巻11号 昭31・9）においても、人となりや来歴とともに、「聡明」という言葉がこれほどよく似合う女性も少い、そして詩人も少い、「彼女の切れ長の澄んだ眼ははつきりと未来を見究めているよう」、「そのファイトはわれわれの現代詩に大きなものを加えることになるだろう」と、聡明さの刻印によって閉じられている。

茨木と川崎洋とで昭和二八年にはじめた「權」には、その一挙手一投足が取り上げられる谷川俊太郎をはじめ、大岡信、吉野弘ら、「詩学」誌上で名を連ねる詩人たちが集ったが、昭和三二年、解散をした。一二巻一四号（昭32・12）に掲載された解散の「公告」は次のようなものだった。

私達は、權の会が解散をするのを最も適した時期に來た事を

お互い確め合うことが出来たので、ここに權の会の解散を公告します。解散の理由は、私たちの一人一人が既に十分影響し合うものを影響し合い、その仕事は權という集団に基礎を置いたものから、独立した個人の仕事に変わってきたのでこれ以上会を存続させて、例えばグループを単位としてその仕事を云々されることなどによつて独立した個人の仕事が誤り伝えられるようなことがないようにしたいと思います。

詩学研究會出身者の有志によつて權の会が発足して以來今まで各方面から寄せられた御好意に報いるには各人が、それぞれの仕事を押し進める他にはないと思ひます。どうぞ今後共御鞭撻下さいます様お願い申し上げます。一九五七年十一月十日

權の會同人

これを受けた同号の「詩壇時評1957」は、「三〇代と二〇代との間に最初に橋を架けた「權」の解散が、この一〇月に行われたということは、なにか今年の詩壇の沈滞氣分の象徴のようにも思われる」、「おそらく、集団で行動し、制作する意味を感じなくなつたのだろう」、「個人個人で道を拓いてゆくより仕方がない」、「それに氣付いていさぎよく解散するということは立派である」、「まつたく次元の異つた場所から新人を探し出してこない限り、この沈滞を破れないかも知れない」、「単なる流行や、同じプロセスの繰り返し

はタクサンである」として、「詩壇の沈滞気分」の反映を見ている。述べてきたような個々人の活躍が、一樣に見られがちな集団から自身を解きたいと望むことは理解しやすい。一方、『詩学』に

とつての彼らは「詩学研究会」の良き象徴だったのだが、当然のことながらいつまでも新人に留まっではいず、個々の自立とともに「詩学研究会」の痕跡は薄れてゆく。そのことは「立派」とされながらも、「まったく次元の異つた場所から新人を探し出して」とあることから、彼らに匹敵する「詩学」発の新人の登場に恵まれていないことも、「沈滞気分」の一隅を占めているのであろうと想像される。

次に見る「日氏賞事件」は、そうした気分の象徴であったのか、あるいはまったく別次元に由来するものであったのか、鮎川信夫をして、「今年は日賞事件が半分くらい占めちやつたでしょう。そんなことだけでわいわいいつてたからね。殆ど何にもない年だね」(「1960年代の詩を探る」(吉野弘・清岡卓行・岩田宏・飯島耕一・鮎川信夫) 15巻3号 昭35・2)と言わしめたこの出来事は、ここから一年半後に起きたのだった。

## 7 日氏賞事件

「日氏賞」は、新人の詩を奨励するために、自身も詩人であった実業家平澤貞二郎が匿名で基金提供をし、昭和二五年に「日本現代詩人会」が主宰創設、現在まで続く詩人賞として知られている。昭和三四年四月、この第九回の銚衡をめぐって怪文書騒動が起り、幹事長であった西脇順三郎をはじめとする幹事会が総辞職するに至ったのが「日氏賞事件」である。この折の受賞は吉岡実「僧侶」であったが、ことは吉岡の詩集の質に関わってはいない。「詩学」誌上では昭和三六年初頭から、北川冬彦の発言を元に関わった詩人たちの疑心暗鬼と潔白証明が再燃し、その年の終わりまで続いている。北川冬彦は、これがために自身が創設に関わり、初代幹事長を務めた「現代詩人会」を同年退会するに及んでいる。

吉岡の受賞翌月には、「時の詩人／日賞注をもらつた吉岡実」(14巻6号 昭34・5)で吉岡の人となりを伝える記事、そして、同号「詩壇時評1959」(14巻6号 昭34・5)では、最近の「詩壇の噂」は「バカバカしいほどケチくさい」が、その「第一」がこの一件だとして、わずか十数人の銚衡関係者であるにかかわらず、銚衡方法に関する不満や疑問を対面で意見せずに、「村会議員の選挙み

たに、あつちこつち手を廻したり、匿名の怪文書を飛ばしたりは、まったく醜態」、現代詩人会の「末も見えたり」と落胆はなほだしい心持ちを憤懣とともに表明している。また、こうしたことを受けてか、同号には「第9回現代詩人会日賞銓衡」と題し、「銓衡経過」と「銓衡委員感想」が掲載された。その趣旨は冒頭で次のようにあげられている。

現代詩人会日賞については、従来その銓衡経過が公表されたことはなかつたが、既に九人の受賞詩人を数える詩壇唯一の詩人賞としての意義を考え、本紙は特に乞うて事務当局の銓衡経過と、銓衡委員の感想をここに掲げることとした。

安藤一郎、緒方昇、上林猷夫、北川冬彦、高橋新吉、土橋治重、村野四郎、長島三芳が、推した詩集や感想、銓衡経緯などをそれぞれ視点から、なかには今般の経緯における自らの心的負担の述懐や非難を織り交ぜながら、文の長短も自由に述べている。

特筆すべきは村野四郎であり、「一つの作品集が、常識によつて点をかせいだのではなくて、オリジナリテイの強さによつて受賞したということは、選考に当つた一人としても、実に後味のいいものであつた」とし、「一見難解で、一般の読者の耳には負えないかもしれないが、常識的な詩にあきた人々や十分にシユルレアリズムを消化した人々にとつては、非常に興味深い詩集」、「すべての作品の

主題が、汚辱と悪意にみちた廿世紀の醜聞に発している」、「イメージの審美的衝撃力も又すばらしい」、「このような衝撃力は一つの作品が、文学として一番危険な状態におかれてはじめて獲得されるところのものであることを思わせた」と分析、吉岡の「僧侶」をシユルレアリスムの系譜から丁寧位置付け、受賞の意義を明確にし、銓衡の結果を作品の質から保証している点において際立っている。

特異な経緯を孕んだ銓衡において、この「感想」は受賞者にとつても読者にとつても意義深いものであつたに違いない。

「詩壇時評1959」（14巻10号 昭34・8）によれば、同年七月には現代詩人会の臨時総会が開かれ、前述のとおり幹事会の総辞職となつたが、高橋新吉はそれに反対して匿名投書の主を追究すべきと主張、これに対して、先の村野四郎が、幹事会の中にはこの追究を好まない節があり、このまま推移すればいっそうのスキヤンダルと醜聞を生みかねないとして、総辞職と新しい幹事会への委託を意見したとある。時評子は、「臨時総会の出席者十九名、委任状二十九通合計四十八という議決権は、かろうじてこの会を支えている数字」と述べ、「会員以外の若い詩人たちは、匿名事件以来ますますこの会を問題にしなくなる傾向にある」と指摘、現代詩人会再建のためには、「再び権勢欲に憑かれたカゲの声などに絶対に操られることなく、ガラス張りで会の運営をはかつてもらいたい」と要望し

ている。そして、同年末（『詩壇の動き』14巻14号 昭34・12）には、「現代詩人会新幹事挨拶状」が掲載され、改革を伴った新たな運営への約束が新幹事会によってなされるにいたる。しかしながら、本節冒頭でも述べたとおり、この禍根は深く、二年後に再燃することになるのである。

「日氏賞事件」の前年、「新しい詩の条件」（13巻8号 昭33・7）と題して明治三〇年前後に生まれた金子光晴、壺井繁治から、昭和初年代生まれの大岡信、谷川俊太郎らにいたる各世代総勢十四名による大座談会が掲載され、いわゆる「六〇年代詩」手前の「詩」に関するとらえ方を広い年代層でさまざまに浮き彫りにしている。これについては、すでに別稿<sup>註4</sup>で論じたので詳細は譲るが、こうした大座談会を形成できるのは、さまざまな年代を書き手として参加させている『詩学』ならではの企画と受けとめられる。このあと、昭和三五年には十代の詩人藤森安和の登場に誌上が揺らぎ、詩論家としての吉本隆明、大岡信の活躍が注目されるなか、学際的で重厚な特集も組まれてゆくようになるが、傍らでは伊達得夫の急逝による『ユリイカ』廃刊、『現代詩』の休刊を迎え、『現代詩手帖』の急進が始まる。続稿を期したい。

## 注

- (1) 『詩誌『詩学』の世界―はじまりの10年』（愛知県立大学 文字文化財研究所紀要 令3・3）
- (2) 注(1) 論文にて詳述。
- (3) 『壇輪』（『権』10号 昭30・1、同11号 昭30・4）は、『權詩劇作品集』（昭32・9 的場書房）に収録ののち、昭和三年一月、再構成してTBSラジオ芸術祭参加ドラマとして放送。
- (4) 田口麻奈「第Ⅱ部 鮎川信夫の「荒地」第二章 一九五〇年代の詩壇と「荒地」（『空白の根底―鮎川信夫と日本戦後詩』平31・2 思潮社）は、『詩学』誌上で特集を組まれる「詩劇」への着目から、田村隆一や「荒地」の詩人たちがそれぞれ共鳴するスタイルの作品を書き、鮎川の「橋上の人」決定稿もそれを体現したものとして位置付けている。
- (5) 田口麻奈「『死の灰詩集』論争と戦後詩における〈近代〉批判の布置」（『現代詩』復刻版別冊』令2・4 三人社）は、「戦後詩人としての鮎川の主張の要点」として「戦前と戦後とを併置した全体主義批判、また全体主義の礎となる〈近

代」批判」を指摘、「戦後初期からの鮎川の発議」が「ついに『死の灰詩集』と交叉」したと位置付けている。

(6) 「大岡信の初期詩論―詩はまるで、愛のようなものだ―」

(『るる』平29・6)

(7) 当時の呼称は「日賞」だった。

(8) 「反芻される「荒地」―継承と批判の六〇年代」(『昭和文学研究』平25・9)

\*本稿は、日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究

(C) 「雑誌『詩学』『現代詩』『ユリイカ』を中心とする昭和30年代詩の研究」に拠る成果である。